

食卓テーブルに三人の男子が集まって打ち合わせをしていた。

傍にはペットボトルの飲み物が置かれていて、一人の男子が記録係になり、なにやらペンを走らせていた。

「よし、じゃあゴミは当番制な。可燃ごみが火、金で、プラが水曜だから、カレンダーに順番に名前書いとうよ」

「そうだな」

「ゴミ捨ては日にちを間違えないように厳守な。絶対サボるなよ」

「OK」

「食事はどうする？」

「各自でいいだろ」

「そうだな。帰ってくる時間もばらばらだしな。それが一番いいと思う」

「でもタクは料理が上手いんだよな。タクの料理食いたい気もするけどな」

「ハハハ。たまには作ってやるよ」

三人は和やかな雰囲気ですべてを決めていた。

集まっているのは高校時代の同級生で、卓也、真一、守の三人だった。この三人は同じクラスで仲が良く、親同士も仲がいいという親友同士だった。

高校卒業したら都会へ出たいと言い出し、ならば三人でルームシェアしようということになったのだ。

高校を卒業した三人は揃って都会へ出てきて、不動産屋を訪ねて賃貸物件を決めた。一軒家のような建物で、ちょうど部屋が三つあり、ちょっとしたキッチンホールもあるという、最適な物件を見つけたのだ。

三人が集まるときはそのキッチンホールを利用している。そこには四人用のテーブルが置いてあり、それはホームセンターで見つけて購入したものだった。三人ともそのテーブルが気に入っていた。

彼らはまだ就職が決まっておらず、これから職探しなのだが、しばらくは気楽なフリーターで遊びたいということで意見が一致していた。

今は三人が集まって、いろいろと決まり事やルールを決めているところだった。

「じゃあ、これでほぼ決めることは決まったね。他に何かある？」

卓也が言った。彼はこういうときに率先して皆を引っ張るリーダー的な存在だった。学校の成績も、三人の中では一番よく、いろんなことに機転が利く存在だった。

「いいんじゃない？」

と守が言った。

守はわりとアバウトな性格で、面倒くさがりやな方だった。話もよく聞いてなくて、いつも周りから注意されていたのだ。

今もこの打ち合わせが早く終わらないかと思っている。早く終えて部屋でのんびりした

いと思っている男だった。

「ねえ、彼女とか連れ込んでいいの？」

真一が言いだした。

「彼女？」

三人は顔を見合わせた。基本三人での生活なので、あまり関係ない人は入れたくないという頭が三人の中にあった。

「どうしよう……そういうときもあるよな」

卓也が言うと、他の二人も「あるある」と同調した。

まだ三人とも、ここに越してきたばかりで当然彼女などいないのだ。彼女ができたという想定での話だ。

「いいんじゃないの？ って俺はいいと思うけど。彼女ならね」

「俺もいいよ」

卓也と守の意見が一致した。

「そうだよな。これが女の子だけのルームシェアだったら、男子禁制とかなるんだろうけど、俺たち全員男だし、女の子が来てもいいんじゃないのって俺は思う」

真一が思っていることを口にした。

「でも男友達とかはやめとこうよ。部屋でドンチャン騒ぎされても困るし」

「そうだな」

守が言うと真一が頷いた。

「じゃあ、こうしよう。この中の誰かの恋人ならOK。ただしそれ以外の、わけ分かんない女？ たえばナンパしてきた女とか、騒ぎそうな女とか。そういうのはNG。で、男友達は無条件でNG」

卓也がそう言ってまとめた。その意見に他の二人も頷いて納得した。

「あともう一つ」

卓也は人差し指を立てて言った。それを二人は黙って聞く。

「これはお願いだけど。やっぱりみんな、ちゃんと仕事はしような。バイトでも正社員でもいいから。仕事しないでブラブラしてるのはダメだと思うんだよ」

「うんうん。そりゃそうだ、ある程度の厳しさもないとな」

「ニートはダメってことだな」

「そう。生活が荒れてくると絶対良くないと思うから」

卓也の意見はいつも適格だった。そんな彼のことを二人は頼っているところもあり、自然と彼に意見を求めて従ってしまうのだ。

「俺もそう思う」

と真一。

「いいなマモル」

「俺かよ」

「お前がいちばん怠けそうだから」

と真一がからかうように言う。

「そんなことないよ。バイトはちゃんとやるよ」

そんな二人を卓也は微笑ましく見た。

「よし、決まった。今日はこれぐらいにしよう。また何かあったらそのときに話し合おう」

守と真一は、卓也の言うことに賛同して、三人は席を立ち、それぞれの部屋に戻っていった。

こうして仲良し三人組のルームシェアはスタートしたのだ。